

平成 28 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

アジア圏における観光施策について

～産業観光及び地域住民主体型観光～

調査地：マレーシア クアラルンプール市

インドネシア ウブド村

調査日：平成 28 年 9 月 21 日、26 日

平成 29 年 2 月

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 企画・コンサルタント業務課 渡瀬 航

目 次

1 はじめに

2 産業観光について ―クアラルンプール市 ロイヤルセラランゴール工場見学―

(1) マレーシア・クアラルンプール市の概要

(2) ロイヤルセラランゴール社について

(3) 工場見学の内容及び考察

3 住民主体型観光について ―ウブド村 モンキーフォレスト―

(1) インドネシア・ウブド村の概要

(2) モンキーフォレストについて

(3) モンキーフォレストの運営手法と住民主体型観光のあり方について

4 四日市市の観光の現状

5 まとめ

1 はじめに

私の派遣元である四日市市は、石油化学産業や最先端の半導体産業、自動車関連産業など多様な企業が数多く立地する、製造業を中心に発展を遂げてきた都市である。産業構造や、市税収入に占める法人市民税、固定資産税の割合から見ても製造業が大きなウェイトを占めており、これまで市としては企業の誘致施策や、設備投資を促進する施策を重点的に実施してきた。

しかし、現状では製造業の企業を誘致するための公的な工業用地は完売しているほか、民有地においても工場立地に適する規模を有し、かつ都市計画に定める利用用途が工業用地として適合する土地はごく僅かであり、従来の工場誘致の施策のみでは市の大幅な発展を期待できない状況となっている。また、かつて、製造業の発展の過程で四大公害病の一つである四日市ぜんそくが発生し、四日市市は今でも公害のまち、空気が汚いまち、というイメージが市の内外において根強く残っている。

こうした状況を踏まえ、四日市市では都市イメージの転換と、域外からの資金の獲得という観点から、観光施策の展開に取り組んでいる。平成 23 年度を「四日市の観光元年」と宣言して以降は、市にゆかりのある著名人を四日市市観光大使に選任して実施する PR 事業や、映画のロケ地として市が使われるよう誘致を行うフィルムコミッション活動など、様々な取組を進めている。平成 28 年 3 月には、観光推進及びシティプロモーションにおける基本理念や市民、事業者及び行政の役割等を定める、四日市市観光・シティプロモーション条例を公布するなど、市政における観光施策の位置づけは、年々重要度が高くなってきている。

そこで、四日市市の観光施策の参考とするべく、近隣のアジア諸国の観光に関する取組の中から、下記の 2 つについて調査を実施することとした。

(1) マレーシアにおける産業観光の取組

(2) インドネシア・バリ島における住民主体型観光の取組

1 つ目の調査地であるマレーシアは、都市部ではショッピングやグルメなどが楽しめ、都市部を外れればリゾートとしての魅力を有している。また、世界遺産や熱帯の動植物、先住民族の伝統文化など、豊富な観光資源に恵まれている。一般的にはこうした観光資源に注目が集まりがちだが、その一方で工場見学等の産業観光の取組も人気を博している。四日市市において観光施策を考えるにあたっては、国内有数の工業都市として、産業観光が重要な要素の一つとして挙げられることから、マレーシアにおける産業観光の取組を調査対象とした。

2 つ目の調査地であるインドネシアのバリ島は、マレーシアと同様に観光地として世界的な名声を得ているが、その発展が国家主導によってなされたものとして批判を伴うものであったことから、現在は地域住民が主体となった持続可能な観光施策を重視し、実践している。四日市市においても、観光振興の取組について、行政だけではなく市民も主体的に参画することによって、観光活動の持続的な発展が見込めることから、バリ島における地域住民主体型観光を調査対象とした。

これらについて調査を行った上で、それぞれの特色等を考察し、四日市市における観光活動に活かすことのできる要素がないか検討を行う。

2 産業観光について ―クアラルンプール市 ロイヤルセラランゴール工場見学―

(1) マレーシア・クアラルンプール市の概要

マレーシアは、マレー半島南部とボルネオ島北部からなり、国土面積は 約 33 万平方キロメートル（日本の面積の約 90%）で、うち約 58%が熱帯雨林で覆われ、様々な固有の生態系の宝庫となっている。また 127 の民族が暮らす多民族国家であり、人口約 3,000 万人のうち約 60%がマレー系、25%が中国系、7%がインド系、8%が先住民民族などの他の民族となっている。それぞれの民族が独自の言語や宗教を持ちながらも「1 マレーシア（ワンマレーシア）」としてまとまっている。互いの宗教や文化、慣習を認め合い、各民族が平和に共生していることから、世界で最も成功した多民族国家とも呼ばれる。一方で、かつてはヨーロッパの統治下にあったことから西洋の文化的影響も受けており、こうした文化的・民俗的な多様性が、マレーシア独特の魅力の根源となっている。

クアラルンプール市は、「KL（ケーエル）」の愛称で呼ばれるマレーシアの首都である。発達したインフラを有し、東南アジア最大級の大型ショッピングモールやハイエンドなサービスを提供する高級ホテルが立地するなど、大都市としての顔を持つ一方で、郷愁を呼び起こす古い街並みや市場、緑あふれる湖畔の庭園などの自然や歴史文化も共生する、様々な旅行者のニーズを満たす魅力あふれる国際都市として知られている。今回の視察では、クアラルンプール市の郊外に位置するロイヤルセラランゴール・ビジターセンターにて工場見学を行った。



ロイヤルセラランゴール・ビジターセンター外観

(2) ロイヤルセラランゴール社について

マレーシア国内では、複数のマレーシアブランド企業が工場見学を実施している（次頁の表を参照）。その中でも、マレーシアの伝統工芸であるピューター製品を扱うロイヤルセ

ランゴールの工場を今回の視察先として選定した。

表：工場見学が可能なマレーシアブランド企業の一例

社名	取扱商材	見学行程の概要
Royal Selangor (ロイヤルセランゴール)	ピューター製の テーブルウェア等	非常に古いピューター製品を展示したミュージアムの他、職人の手による加工の工程を間近で見学可能
Beryl's Chocolate (ベリルズチョコレート)	チョコレート	製造工程をまとめたビデオ映像を鑑賞の後、チョコレート作りの歴史に関する展示コーナーを見学
PLS Marketing (PLS マーケティング)	精米	会社の歴史等をまとめたビデオ映像を鑑賞の後、パネル展示等で稲作等について学習 ガラス越しに精米やパッキングの工程の見学も可能
Spritzer Bhd (スプリッツァー)	天然ミネラル水 ペットボトル	ペットボトルの製造過程から殺菌、天然水の注入、ラベリングまでの一連の工程を見学可能
Mamee-Double Decker (マミー・ダブルデッカー)	インスタント ヌードル	会社の歴史等をまとめたビデオ映像を鑑賞の後、ガラス越しに工場の製造ラインを見学可能
Gardenia (ガーデニア)	パン製品	会社の歴史、製造工程等をまとめたビデオ映像を鑑賞の後、ガラス越しに工場の製造ラインを見学可能

ピューターとは金属の^{すず}錫を主成分として、他に少量の銅やアンチモンを混ぜ合わせた合金である。錆びにくく保冷効果が高いという特徴があり、ビールジョッキやタンブラーなど、主としてテーブルウェアに用いられているが、花瓶や像、アクセサリーなどその用途は多岐に渡る。

マレーシアにおいてピューターの加工品産業が興った背景は、イギリス統治下であった19世紀の半ば、クアラルンプール市を取り囲む今のセランゴール州に、錫の大鉱脈が発見された時代まで遡る。錫を用いたピューターの、錆びない、柔らかく溶接に適している、保冷性に優れ



ピューター製品

るという特性から、既に産業革命によって工業大国となっていたイギリスはもとより、西洋諸国からの需要を受けてコンピューターの加工品産業は飛躍的に拡大した。

ロイヤルセランゴールはそうした背景の中で 1885 年に創業、その後順調に発展を遂げてきた企業で、コンピューター製のテーブルウェアを中心に、置物やアクセサリ類も手掛けるほか、オーダーメイドのトロフィーの製作なども受け付けている。マレーシアにはコンピューター製品を扱う企業が複数立地しているが、ロイヤルセランゴールがマレーシア国内でのシェア 1 位となっており、国内のみならず欧米を中心とした全世界に年間約 70 万個のコンピューター製品を輸出している。1992 年には社としての文化的・社会的貢献への功績を賞して、マレーシア国王より「ロイヤル」の称号を授けられるなど、文字通りマレーシアを代表するコンピューター製品の供給企業である（これを受けて社名を「ロイヤルセランゴール」と変更する以前は、「セランゴールコンピューター」であった）。

今回の視察で同社を選定した理由は、世界最大の閲覧数を誇る旅行情報サイト「トリップアドバイザー」において、「トラベラーズチョイスアワード(以下、TCA)2016」に選出されていたためである。「TCA」とは、同サイトの利用者による口コミ評価を基に同サイトが認定するもので、単に人気が高いだけではなく、旅行者がリピートする真に優れた施設や旅行先に与えられる。今回の視察にあたって、同サイトでアジア圏における工場見学について検索を行ったところ、701 件のコンテンツが検索結果としてあがり、その中で「TCA」に選出されていたのはロイヤルセランゴールの工場見学 1 件のみであった。すなわち、アジア圏における工場見学において、同社の工場見学は他と比しても非常に高い評価を得ているということが言える。このような高い評価を得ている理由を考察し、四日市市の産業観光の取組の参考とすべく同社を視察先として選定した。

（３）工場見学の内容及び考察

今回見学に赴いた工場はクアラルンプール市北東の郊外に位置しており、市の中心部から車で約 20 分の距離にある。年中無休、予約不要、無料かつ見学実施にかかる最少催行人数の設定もなく、受け入れの間口を非常に広いものとしている。駐車スペースは広く取られており、視察当日も我々のほか、観光バスによる大口の視察を受け入れていた。英語のガイドのほか日本語対応のガイドもあり、非常に流暢な日本語で応対を行っていた。

工場に入っただけの空間には、マレーシアの錫産地としての歴史や同社の歩みが展示されており、その先には大昔に使われていたコンピューター製の動物の形の貨幣や、アンティークのコンピューター製食器類などが展示される博物館ともいえるスペースがある。ガイドの説明を受けながらこれらの展示を鑑賞するだけでもかなりの見応えがあった。

展示を鑑賞した後は工場スペースへと入っていくのだが、足を踏み入れるとすぐに実際の加



工場スペース

工作業を行っている様子が一望でき、圧巻の様相となっていた。続いて、よく冷えたドリンクがピューター製の小さなゴブレットに入れられて見学者に配布され、ピューター製品の保冷効果を実体験することができた。

そしてその後には、職人の手作業によって、コップの取っ手部分を作る工程、コップの本体部分に模様を削り入れる工程、コップの本体部分をハンマーで叩いてうろこ状の模様を入れる工程などを、ガラス製の間仕切りなどに遮られることなく、文字通り目の前で見学することができた。どの工程も難なくこなしているように見えたが、もちろん誰にでもできるというものではなく、長期の訓練を経て習得した技術があつてはじめてなせるもの、とのことであった。これらの工程の見学の後、職人達が各々の作業スペースで様々な加工を行っている様子を俯瞰するかたちで工場内を進み、ショップスペースへと入っていく。ショップスペースも非常に広く設けられ、当ショップ限定の商品も多数取りそろえるなど豊富な品ぞろえとなっており、見学者の購買意欲をかき立てるものとなっていた。



取っ手を作る工程



模様を削り入れる工程



うろこ状の模様を入れる工程

実際に工場見学に参加した体験を通して、高評価に繋がっているポイントを下記のとおり整理した。

- ①商品の特性（ここではピューター製品の持つ保冷効果）を実際に体験できること
- ②製造工程をガラスなどの隔たりを介さずに直接間近で見られるということ
- ③製造工程の説明を、映像や展示ではなく商用品の加工の現場で行うこと

先述のとおり、工場見学の参加者はピューター製のゴブレットに入った冷たいドリンクを配られ、その保冷効果について実体験することとなる。この体験により、自分がこれから見学するものは、価値のある物を作る工程である、という認識が芽生える。そして見学に進むと、ガラスなどの隔たりもない状態で、加工を行っている様子を間近で見ることができる。見学用の通路から遠くにある製造ラインをガラス越しに見る、といった工場見学とは比べ物にならないほどの臨場感を感じることができる。さらにこの工場見学では、製造工程に関しては展示や映像といった媒体は一切使用せず、現場の見学のみをコンテンツとして提供している。これによって、見学用の施設ではなく実際の工場を見学しているという臨場感に拍車がかかっている。

ロイヤルセランゴールの工場は国内外を含めこの施設のみであり、世界中に出荷されている製品は全てこの工場で製造されている。世界に向けて送り出されている一流品が製造される現場を、リアリティや臨場感を損なうことなく見学できるということが、この工場見学の評価に繋がっていると感じた。

3 住民主体型観光について ―ウブド村 モンキーフォレスト―

(1) インドネシア・ウブド村の概要

インドネシア共和国は東南アジアの南部、赤道にまたがって東西約5千キロメートルに広がる国である。国土面積は約190万平方キロメートル（日本のおよそ5倍）であり、1万数千という大小様々な島で構成されている。人口約2億5,000万人のうち大多数がマレー系であるが、300を超える民族が暮らす多民族国家となっている。赤道直下の熱帯性気候に属し、基本的にはカカオやココナッツ、バナナなどを栽培する農業国だが、オランダによる統治からの独立後は政府の保護政策によって化学繊維やパルプなどの工業が確立した。近年では日本からの製造業者の進出も多い。バリ島やジャワ島などのリゾート地、歴史的建造物や遺跡、音楽、料理、手つかずの自然など、多彩な魅力に溢れている。

バリは、インドネシアに33ある州の1つであり、8つの県と1つの行政都市から成る。バリは国土の0.3%にも満たない小さな島ではあるが、今日では国際的な観光地として名を馳せている。古くは農業が産業の中心であったが、芸能・芸術の島として、また雄大な自然が成す優れた景観を有する島としてリゾート開発が進められた結果、観光業がバリ州全体の経済活動の40%を占めるに至っている。



ウブド村は、バリ島の中部に位置する、田園風景が広がる静かな村である。デンパサール国際空港が立地しバリ島の玄関口となっている南部の都市デンパサールから、車で1時間ほどの距離であり、美術館やギャラリーが多く、豊かな自然と芸術・文化が満喫できる観光地として人気を博している。今回、このウブド村にあるモンキーフォレストにて視察

を行うとともに、モンキーフォレストの管理事務所長から運営方法等についてヒアリングを実施した。

（２）モンキーフォレストについて

モンキーフォレストとは、バリ島内に３カ所ある野生猿の自然保護区である。「モンキー(猿の)フォレスト(森)」という名前のとおり、鬱蒼と茂る森の中に多数の野生の猿が生息しており、人気の観光スポットとなっている。今回視察先としたウブド村のモンキーフォレストは、面積約 12.5 ヘクタール（東京ドーム約 2.5 個分）という広大な面積を誇り、約 650 頭の野生猿が生息している。またヒンドゥー教の寺院が３つ立地し、生い茂る木々が作り出す雰囲気とあいまって、宗教建築の荘厳さや文化的な重みを感じることもできる。ウブドを代表する観光地の一つであり、視察当日も多くの外国人で賑わっていた。



入口のモニュメント



ヒンドゥー教の寺院



視察当日も外国人で賑わっていた

今回、視察先としてこのモンキーフォレストを選定した理由は、住民主体型の持続可能な観光活動の成功事例とされているためである。モンキーフォレストの運営には、トリ・ヒタ・カラナという哲学が根底にある。トリ・ヒタ・カラナとは、神と人、人と人、人と自然という三者の調和を重視するバリ・ヒンドゥーの概念であり、バリで 1990 年代以降高まったサステイナブル・ツーリズム^{注1}（持続可能な観光）の動きにおいても重視されている。この概念は「トリ・ヒタ・カラナ観光賞プログラム」^{注2}という具体の施策にも展開され、バリにおける観光活動の発展に対して一定の方針づけがなされている。

バリにおいてサステイナブル・ツーリズムが重要視されることとなった背景は、バリの観光開発が長きに渡りバリ島外の勢力によって主導されたマス・ツーリズム^{注3}（大衆化された観光活動）の流れに乗ってきたことにある。オランダによる統治時代の観光開発に始まり、オランダからの独立後は、インドネシア中央政府が指揮を執って開発を進めた。その結果、観光によって得られる収益の多くが島外に流出するとともに、大衆の受け入れを

前提とした観光開発の影響による環境の劣化や文化の衰退、治安の悪化や地域間経済格差など、様々な問題に直面することとなった。こうした状況への反省・対応のために、地方村で地域住民が主導し、その地域の自然や文化遺産の保全に貢献する観光活動、すなわちサステイナブル・ツーリズムが注目されるようになったのである。

先述のマス・ツーリズムのように、観光活動はその発展のさせ方によっては、環境破壊等の負の影響を地域にもたらす可能性がある。四日市での観光活動の持続可能な発展を考える参考とするべく、地域住民が主体となって持続可能な観光活動を展開しているモンキーフォレストを視察先として選定した。

（３）モンキーフォレストの運営手法と住民主体型観光のあり方について

モンキーフォレストの運営について、モンキーフォレストの管理事務所長から話を聞くことができた。このモンキーフォレストは、パダン・テガル慣習村の住民によって管理がなされている。この「慣習村」というのは、住民登録証や出生届、結婚証明書などの作成といった行政機能を司るものではなく、儀礼をめぐる慣習をもとにまとまって、宗教行事や伝統的社会活動に従事する地域コミュニティを指す。管理事務所のスタッフは必ずこの慣習村の住民から採用されており、運営方針は定期的に開催される慣習村の会議の中で決定されている。

モンキーフォレストの売り上げは、まず管理事務所スタッフの人件費などの運営費用に充てられ、余剰分は村の祭りや火葬式の費用、村民が大学に進学する際にかかる費用などへの支援といったかたちで村に還元される。また、経済的に困窮している村民に対して、モンキーフォレスト内で露店商人として働く機会を与えるなど、村民の経済的安定化への貢献も果たしている。すなわちモンキーフォレストの儲けは村の暮らしの潤いに直結しており、そのためスタッフはもちろんスタッフ以外の村民もモンキーフォレストの運営に前向きに携わるようになり、魅力的な観光地としてのクオリティの維持を実現し、入場料収入のみで黒字を達成することができている。

管理事務所長によれば、運営に際して政府からの支援は受けておらず、自主的な運営による収益のみで納税の義務も果たしており、インドネシアにあって同様な団体に納税義務を果たしているところは珍しいという。視察時点でも運営は非常に順調とのことで、さらに4haの土地を購入して区域を拡大する方向で調整を行っているとのことだった。

モンキーフォレストの運営手法のヒアリングを通して、住民主体型観光の実現は観光活動と住民の暮らしが密接に連動しているからこそなされるものだということを強く感じた。日本においても地域住民の観光活動への参画が求められているが、行政によるそういった呼びかけはリタイア層の生きがい創出と絡めたものなど、観光活動への参画に対する報酬を求めない、ボランティア精神を期待したものが多いように感じられる。モンキーフォレストの取組のように、観光活動によって生まれる利潤が地域住民の暮らしの潤いに直結していれば、地域住民は自ずと観光活動に対して協力的になることは明白である。観光活動の持続的な発展のために、観光活動によって生まれる利益が地域にしっかりと還元される

仕組みを作り上げ、地域住民の主体的な参画を引き出すことが重要であると感じた。

4 四日市市の観光の現状

ここで、現状の四日市市の観光において、産業観光がどのように位置づけられているか、また観光における地域住民の役割がどのように捉えられているかについて確認したい。

右図は、四日市観光協会 HP のトップページである。「ジャンルから探す」と称して観る、食べる、泊まる、遊ぶ、買う、という観光客の行動ジャンル別に記事をまとめた段の下に、「四日市を知る」として歴史、特産品、産業観光、アクセス、祭り・イベントという記事分類がなされている。

ここで四日市市の独自性が表れているのは、やはり「産業観光」という分類が設けられている点であろう。産業都市四日



市の特性を活かした観光として、産業観光が重要なポジションに位置付けられていることが確認できる。また、ページ左側に配置されたバナーを見ても、下記のとおり6つのバナーのうち4つが工場夜景に関するものであり、ここからも産業にちなんだ観光活動が推されていることが分かる。

- | | | |
|--|---|------------|
| <ul style="list-style-type: none">①四日市コンビナートの夜景②工場夜景の日③全国工場夜景都市④四日市コンビナート夜景クルーズ⑤四日市観光協会お勧め厳選グッズ販売⑥四日市の商店街をご案内 | } | 工場夜景関連のバナー |
|--|---|------------|

事実、臨海部に位置する石油化学コンビナートの工場群が夜間に発する工場灯や保安灯の明かりを観光資源としたコンビナート夜景クルーズは、平成22年の催行開始以降、非常に高い人気を維持し続けている。

続いて、下記は四日市市観光・シティプロモーション条例（一部抜粋）である。

四日市市観光・シティプロモーション条例（平成28年3月23日公布）

（市民等の役割）

第5条 市民等は、地域資源を利用又は活用し、来訪者等に温かいもてなしの心で接する等、地域の魅力の創造及び発信に積極的な役割を果たすよう努めるものとする。

2 市民等は、市が実施する地域の魅力の創造及び発信に関する施策に協力するよう努めるものとする。

このように、努力規定とはなっているものの、条例においては、市民が観光において積極的な役割を果たすよう要請している。市民が観光活動に主体的に参加する例としては、まず観光協会との連携による「観光ボランティアガイド」が挙げられる。来訪者が市内観光をする際、観光協会に対しボランティアガイドの利用を希望することができる。この利用希望に対し、観光協会に登録している市民ボランティアの中で、日程等の都合がつく人員が対応を行う。また、先述のコンビナート夜景クルーズにおいても、コンビナート企業のOB人材がクルーズガイドとして同行し、クルーズ中に見える設備が生産工程の中で果たしている役割など、コンビナートの基礎的な知識の説明を行っている。

5 まとめ

マレーシア及びインドネシアでの視察内容と、四日市市の観光の現状を踏まえ、今後の四日市市における効果的な観光について提案を行い、本稿のまとめとしたい。

マレーシア、ロイヤルセランゴールの工場見学では、産業観光においては見学対象となるものの価値の高さを認識させた上で、臨場感を重視した見せ方とすることで、非常に高い満足が得られるということを学んだ。インドネシア、モンキーフォレストでは、持続可能な観光という概念を念頭に置いた住民主体型の魅力的な観光活動が展開され、その活動によって得られる利潤が住民の暮らしの向上と密接に結びついており、このことによって住民の積極的な参画を引き出しているということを学んだ。これらを取り入れた四日市市における観光活動は、以下のようなものが考えられる。

来訪者に産業都市四日市市の魅力を感じてもらうために効果的な手法は、やはり工場見学であると考えられる。臨海部の石油化学コンビナート企業の工場はもちろん、内陸部の中小企業や四日市ばんこ焼きなどの地場産業の事業者も見学対象として十分な魅力を有している。工場見学の現場では、臨場感を損なうことがないように、できる限り実際の製造・加工の様子を間近で見られるように見学ルートを設定する。こうした臨場感の確保に際して課題となってくるのが見学者の安全の担保であるが、このために必要となってくる安全管理員（ガイド）を、見学先となる事業者及び同業種の事業者OBを中心とした市民によって担う。行政は、こうした体制が取れるよう事業者OBが講師となったガイド養成のための講座を開催するとともに、見学を受け入れる事業者とこうした市民ガイドとの橋渡しを行う。この仕組みにより、見学を受け入れる事業者、ガイドを担う市民、行政の3者そ

れぞれに、以下のようなメリットが期待できる。3 者それぞれがメリットを享受しながら展開できる事業構造とすることで、持続的な発展の実現を期するものである。

見学受け入れ事業者：製品及び社名のPR効果 ガイドを担う市民：ガイドを担うことで得られる報酬 行政：産業都市としての知名度向上による都市イメージの向上

上述の案はあくまで私案であり、実現のためには様々な障壁があると考えられる。ただこうした検討を通して、市民・事業者・行政が一体となって、産業都市として有する魅力を存分に発揮しながら持続的な発展を見据えた観光のあり方を模索し続けていくことが、四日市市の観光力を高めていくために必要であると考えます。

注

1) サステイナブル・ツーリズム

観光地の本来の姿を持続的に保つことができるように、観光地の開発やサービスのあり方を見定め旅行の設定を行うこと。マス・ツーリズムの進展により、環境汚染や自然破壊などの現象が見られるようになった。この反省から、地域の文化や自然環境に配慮し、本物を体験し味わうことなどを通し、観光地に住む住民と観光客とが相互に潤うことが重要との考えが生まれてきた。1992（平成 4）年の「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」で発表された行動計画「アジェンダ 21」に基づき、世界観光機関（UNWTO）、世界旅行ツーリズム協議会（WTTC）、地球会議（Earth Council）の 3 者により、1995（平成 7）年に「観光産業のためのアジェンダ 21」（Agenda 21 for the Travel & Tourism Industry）が表明された。サステイナブル・ツーリズムの考えが盛り込まれたこの計画に基づき、入境する人数の制限、電気自動車の利用による排ガス規制、必要な搭乗客にだけに出す機内サービスなど、多くの分野で様々な取組が始まっている。（JTB総合研究所より）

2) トリ・ヒタ・カラナ観光賞プログラム

バリ独自のサステイナブル・ツーリズムをバリ州全体で促進させるために、その指標づくりと評価体制を確立することが求められ、始められたプログラム。バリ・トラベル・ニュースとオーストラリアの環境研究プロジェクト、バリ研究センターの共同で、2000 年より開始された。このプログラムでは、環境研究プロジェクトおよびバリ・トラベル・ニュースの専門家が作成した選考リストを基に、ホテルや観光サイトなどを対象に審査が行われる。あらかじめ対象者に配布されたアンケート調査の結果に従って一次選考が実施された後、該当企業の立会いの下で施設の調査が行われる。アンケート調査は、①寺院の管理や宗教儀式の実施頻度、宗教行事への参加状況といった宗教的観点からの問い、②従業員の関係、従業員と地域住民との関係といった人間関係に関するもの、③環境保全への取り組みなど、約 60 の質問から構成されている。ホテル部門、観光サイト部門などがあり、評価の高かった施設は、毎年 12 月に開催されるトリ・ヒタ・カラナ観光賞授与式にて表彰さ

れる。このプログラムに対して、バリ州政府が2001年より補助金を出しており、年間1億ルピア（約100万円）以上の財政的支援はプログラムを実施する上で欠かせないものとなっている。世界観光機関も当プログラムの重要性を強調し、2004年から支援している。プログラムが始まった2000年には、参加団体は62であったが、2008年には100以上の団体が参加している。

3) マス・ツーリズム

第2次世界大戦後の経済発展を背景に、それまで富裕層に限られていた観光旅行が、幅広く大衆にまで拡大した現象を指す。1950年代に米国で現れ、その後、欧州に広まった。日本は、1970（昭和45）年の大阪万博を境に旅行の大衆化が一気に進んだ。戦後の経済成長に伴う可処分所得の増加、1964（昭和39）年の新幹線開業、1970（昭和45）年のジャンボジェット機就航などに見られる輸送力の向上と高速化、大型ホテル・旅館の開業による宿泊受入数の拡充、雑誌やテレビによる海外観光地情報の流布、パッケージツアーの創出などが背景にある。観光地は経済的な恩恵を受けたものの、環境汚染や自然破壊という課題も抱えた。一方、当初は慰安旅行などの団体旅行が主流であったが、成熟期を迎えた現在の日本は、旅行の個人化と共に、目的志向や高級志向など旅行スタイルの細分化が進んでいる。（JTB総合研究所より）